
Graham Greene 研究

Raven 覚書

宮野祥子

I

A Gun for Sale は1936年に娯楽物 (entertainment) として発表された作品であって、肩のこらない読物、⁽¹⁾〈exciting melodrama〉といわれている作品である。作者自らの serious novel と entertainment という区分に従っているのであるが、諸家がすでに指摘しているように娯楽物の作品にも serious な作品に劣らなく人間の真の姿が、やや安易に書き進められた物語の背後に浮んで来ているのである。この *A Gun for Sale* の場合も同様であって、主人公 Raven はかなり興味深い存在である。

Raven は殺人を職業とする outlaw である。父親は絞首刑となり、母親は台所で自殺をし、彼は保護施設で育った。両親の貧しさと孤独の象徴である hare-lip をもち、このいじけて、ひねくれた小柄な青年は、自分の outlaw であることと、現在を作り上げてきた自分の姿に奇妙な pride をもっているのである。世間に対する不信と孤独を栄養として育った Raven、殺人は憎しみの故ではなく単なる仕事であり、小さな隠しカメラのように〈like little concealed cameras〉正確に現場を記憶する冷静な眼をもち、固く冷たい氷の短剣〈dagger of ice〉を心に抱いた Raven であるが、不思議なことに読者は次第に彼に一種の同情と共鳴を寄せずにはいられなくなるのである。それはこの作品が一つにはメロドラマにつきものの皮相な感傷を読者に喚起するからであろう。例えば Anne との出合い、Anne に対する Raven の信頼、Anne の裏切り、Cholmondeley の描き方等は読者の安易な同情と興味をそそのものである。しかし殺し屋である Raven に奇妙なことであるが、冷たい氷が同時に純粹で美しくもあるように、純な心と正義感を讀みとることができるのもまた確かなことなのである。

その純な心や正義感は一切何に由来するのであろうか。それは殺人者という凶悪な

犯罪者を描きながら、法の世界における悪の問題ではなく、それを越えたところで、人間として欠くことのできない条件、人間が真の意味で人間であるためには絶対犯してはならないこと—evil に値すること—を問題としようとしていることに依るのではないかと考えられるのである。Raven のこの実存の姿を明らかにするために、〈ugly〉と〈hurt〉ということばに焦点をあわせて、いささかこれらのことばの周辺の分析を試みてみたいと思う。このことが Raven の行動の背景を知り、Raven 像を解明する一つの手がかりになるのではないかと考えられるからである。

II

まず〈ugly〉ということばが意味する第一の内容として Raven 自身の hare-lip がある。hare-lip であること、つまり兎のイメージが与えられている人物や、兎と関連させて描写されている人物は他の作品にもかなり見出されるようである。例えば *The Third Man* では Harry Lime の死は Rollo Martins に〈The right-hand mudguard struck him on his shoulder and bowled him over like a rabbit〉と伝えられるし、実際に最後に Harry は〈turned this way and that way like a rabbit dazzled by head-lights〉したあげく射ち殺されてしまう。また短篇 *The Case for the Defence* にも〈He gave a squeak like a rabbit and that was all〉というようにパスにはねられて死ぬ人物が描かれているし、*England Made Me* でも車の前を横切る兎と、その車を運転していた Anthony の死が描かれている。また *The Heart of the Matter* では真実を語る勇気のない Scobie が Mrs. Bowles に頼まれて病気の子供の傍についている場面では、子供が死んでいっているにもかかわらず、気付かないで、兎をハンカチで作って見せる〈taking out his handkerchief he made the shadow of a rabbit's head fall on the pillow beside her. "There is your rabbit," he said〉ところが描かれている。これらに共通していることは、すべて死と結びついていることであって、Raven もその一例である。兎のイメージを与えること、それは〈timid as a hare〉とか〈scared as a rabbit〉という臆病さや、びくびくしている様子を表わそうとするのが目的であるかもしれない。Raven の場合は日の照っている世間に対しては常にびくびくと用心していなければならないことも、その具体的な〈deformity〉と

共に表わしているのだろう。

この肉体的醜さを示す hare-lip は冒頭彼が殺害する老大臣が示すように顔をそむけることによって表わされている。

He let his coat collar fall and saw with bitter rage how the old man turned away from the sight of his hare-lip.

当然のことながら、自分のこの醜さを意識する人間に対して、彼は苦々しい怒り (bitter rage) を感じ、時には美しく魅力的な女の子には、その瞬間のたじろぐ様子に楽しみを感じて、故意に自分の hare-lip をむき出して見せるような残酷な行動の原因ともなっているのである。だから彼の醜さを意識しない小猫 (It had been sublimely unconscious of his ugliness) には、当然彼なりの愛情を注ぐこともできるのである。hare-lip が原因で生ずるこの苦い思いと、それに伴う憎しみを抱いて彼が現在に到るまで生きてきたことは、下記引用文中の、氷雨の中を hare-lip を隠し、警察の目を逃れていく瘦せてすすけた人殺し (this thin smoky murderous figure) に形象されているようである。

He wasn't used to any taste that wasn't bitter on the tongue. He had been made by hatred; it had constructed him into this thin smoky murderous figure in the rain, hunted and ugly.

しかし Raven は (he was made in this image and he had his own odd pride in the result; he didn't want to be un made) というように、自分の姿に奇妙な pride をもっているのである。彼は現在の自分の姿が毀されて何か別の人間のように変形されるのは望んでいないのである。それは (I'd always said I wouldn't go soft on a skirt. I always thought my lip'd save me.) ということばからも理解されるように、彼の唇は女の子に好かれないう handicap であると同時に、outlaw としての生活への出発点 (If a man's born ugly, he doesn't stand a chance.) であり、その生活を守る砦にもなっているのである。ここには世間並みの考え方からすれば handicap であることを逆手にとって advantage とする、つまり世間の裏側で outlaw として生きている Raven が如実にうかがわれるわけで、

法の世界 (right と wrong の世界) を外れて彼独自の道理に従って生きているのである。この点で作者 Greene 自ら〈The main character in the novel, Raven the killer, seems to me now a sketch for Pinkie in *Brighton Rock*. He is a Pinkie who has aged but not grown up.⁽²⁾〉と述べているように, Raven は *Brighton Rock* の不良少年 Pinkie と同質の character と見なされる。

以上のように Raven 自身に関する〈ugly〉が主として肉体的な醜さと、それに由来する情況に限定されているのに対して、少し異なる意味を含んでいるのではないかと思われる用例がある。例えば Raven は以前ブラットホームで人殺しをして逃亡したときの有様を次のように語っている。

He said; "You see it was his lot or our lot. They'd had razors out on the course. It was war." ...

"It sounds ugly," Raven said. "Funny thing is, it wasn't ugly. It was natural."

殺すか殺されるかという場合には、ひどいように聞えるかもしれないが、少しもひどい〈ugly〉のではなく、当然なあたりまえのことだ、と彼は Anne に説明している。これはいわば An eye for an eye の考え方である。Raven の考えでは敵同志が、理由があつて殺人を犯したとき〈ugly〉ということばはあてはまらないのであろう。しかし彼が老大臣の死を語るときは、少し意味が変化しているようである。

I had to kill her to open the door. Then I dreamed she was still alive and I shot her through the eyes. But even that—it wasn't ugly.

真暗な寒い小屋の中で、Raven は Anne と一夜を過ごすことになるのであるが、Anne に真実を打明けるのが恐ろしく、夢の話として、老大臣とその秘書を殺害したことを語るのである。殺す予定ではなかった無関係な秘書を残酷な方法で殺害したのであるが、そのことすらも老大臣の死に比べれば〈ugly〉ではないというのである。

〈But even that—it wasn't ugly〉ということばの背後には、同じく貧乏な人達の仲間であつて、本来なら手も触れるはずではなかった〈I wouldn't have touched him if I'd known he was like that〉老大臣を知らなかったにせよ、仕事であつた

にせよ、殺してしまったことに強い後悔と自責の念があるのではないだろうか。それは〈the death of the old minister lay, ... like an albatross round his neck〉という比喩表現で理解されるように、してはならぬことを犯したという罪の意識へと変質しているのではないだろうか。〈an albatross round his neck〉は *The Rime of the Ancient Mariner* 中の〈Instead of cross, the Albatross / About my neck was hung〉を暗示しており、Coleridge はあほうどりを殺すことと、その結果生じた状態で、人類の墮落のイメージを伝えて⁽³⁾いると、云われているからである。Raven の射殺した老大臣は、船乗りにとって、なぎに風を起す霊鳥であるあほうどりと同じ役割をはたす存在として描出されている。つまり貧乏人の味方で戦争に反対したため、戦争によって私欲を満たそうとした者達によって、彼らに雇われた Raven に殺されたのである。従って Anne の傍で初めて安らかに眠った Raven ⁽⁴⁾のみた二度の夢—たき火と老大臣—には、Christ による罪の許しが暗示されているというのも肯定できる解釈である。さらに Raven は生れて初めて人をつまみ Anne を信頼し、心を許し、告白するのであるが、その Anne の足元に跪いて、逃亡しやすいようにスカートを切ろうとする Raven と、それを見おろしている Anne の二人の構図は、全生命を賭けて Anne を大切に思う Raven の心と、Anne の胸の奥の Raven に対する嫌悪感によって非常に興味ある場面を作り出しているようである。つまり、Anne の中に Raven にとって罪をとりなす聖母的役割と裏切りのユダの役割を二重に認めることができるのではないかと思われるのである。これは一つには相手をひきずり込んで信じさせてしまう Anne という娘の気取りのなさ、卒直さに基づいていると考えられる。それは Raven にプラットホームで初めて声をかけられた時の〈this sense of rather lost and desperate amusement〉という彼女の表情にも表われているようである。夢中で無鉄砲にも喜んでる彼女の常識はずれな他人に対する身構えのなさ、或は、おごって下さるの〈You're standing treat?〉という卒直さでも示されるような、相手を受入れ易い、信じやすい一面がある。それは逆に Raven を驚かしたように、相手の心を動かす積極性をもった受身である。それは一方受身であるが故に、恋人の刑事 Mather に問いつめられれば、Raven の〈complete and hopeless trust〉を心に痛く思い出しながらも、結果として裏切っていく正直であり弱さでもある。

〈ugly〉であること 〈ugly〉でないことには以上のような Raven の心理的背景

があると考えられるのであるが、このことばは母親の自殺を語るにも用いられている。例えば次の如くである。

* the first thing very nearly he could remember, his mother bleeding across the table. She hadn't been troubled to lock the door: that was all she cared about him. He'd done some ugly things in his time, he told himself, but he'd never been able to equal that ugliness.

** and there was my mother—she'd cut her throat—she looked ugly—her head nearly off—she'd sawn at it—with a bread knife—... “That was ugly, wasn't it? You'd think you couldn't beat that for ugliness, couldn't you? She hadn't even thought enough of me to lock the door so as I shouldn't see. And after that, there was a Home. You know all about that. You'd say that was ugly too, but it wasn't ugly as that was.

繰返し Raven の意識に浮ぶ母親の死と、それを形容する〈ugly〉には一体どのような意味内容があるのだろうか。

Raven 自身ひどく〈ugly〉なことを数多く行ってきたし、Home（保護施設）もまたひどくむごい仕打をされた所であったが、Raven にとっては、何にもまして母親の死は〈ugly〉なことだったのである。自分の喉をかき切ったむごい姿を子供に見せまいと、ドアに錠をかけるという配慮に欠けていた母親の方がずっと〈ugly〉であると云うのである。ここには母親に対する子供の苛立しい怒りと恨みに似た感情を読みとることができないだろうか。それは母親を絶対的に肯定しようとし、全存在を賭けて慕う子供を無残に裏切った母親に向けられた Raven の怒りと哀しみの表現であろう。Raven は自分の母親が、母親としてはあるまじき醜いむごい姿を見せたことを知っているのである。それは逆に彼が親としての美しい配慮と愛情を備えた母親の存在への期待をもっていることも表わしている。彼にとって母親の自殺は彼の hare-lip と同様、彼の人生を決定した。

Some day he would. It would be like beginning life over again: to have something else to look back to when somebody spoke of death or blood or wounds or home.

いつか、死とか血とか傷とか家庭ということばを聞いたとき、母親の死以外のことを思い出すことができたとき、人生を再び始めるようだろう、と思う Raven には母親の死は引きつって歩まねばならない重荷であった。彼の足をとどめさせ、身軽な人の邪魔にならぬよう脇道へとそらせる重荷である。このように考えてくると、ここに用いられている〈ugly〉は、柔い子供の心を疎外し、可能性を否定していくような永久に消えない傷、deformity となるような打撃を与える仕打を指しているようである。

III

次に〈hurt〉ということばを取り上げてみたい。Raven は仕事として老大臣を殺害したのだが、その報酬として Cholmondeley から受取ったのは盗まれた紙幣であった。裏切りを知った Raven は Cholmondeley を追って汽車に無札乗車し、無事に改札口を出るため、偶然目についた Anne を威して、彼女の切符と車中で買った切符を交換したのである。そこで邪魔になった Anne を郊外の建売住宅の一軒につれ込み殺害しようとする。次の描写は彼が彼女に的を定めようとしているところである。

“I don't mind your lip,” she said desperately. “You aren't bad-looking. . . .

“turn your back and go over to that door. We'll find a room where I can lock you up for a few hours.” He fixed his eyes on her back; he wanted to shoot her clean; he didn't want to hurt her.

Anne は必死になってさげなく振舞い、Raven の唇のことを〈気にしない〉とか〈そんなにみっともない〉とか云って、Raven の気持を静めようとしているのであるが、そんな Anne を Raven は一発で〈すばつと射ち殺してしまいたかった〉し、傷を負わせて〈苦痛で苛みたくなかった〉と描かれている。Raven にとって自分の不利なことになるような Anne を殺すことは、老大臣の秘書を即座に虐殺したように造作もないことであつたはずである。しかし彼は〈hurt〉したくないからとチャンスを待つ間に、とうとう彼女を逃がしてしまうことになる。Raven をこのように躊躇させたのは何であらうか。

Anne は空家の台所で Raven への恐怖に駆られながらも、自ら励まそうと歌を口ずさむのであるが、それを聞いていた Raven は次のように描かれている。

He said: "I've heard that tune." He couldn't remember where: he remembered a dark night and a cold wind and hunger and the scratch of a needle. It was as if something sharp and cold were breaking in his heart with great pain. He sat there under the sink with the automatic in his hand and began to cry. He made no sound, the tears seemed to run like flies of their own will from the corners of his eyes.

ここには今迄の Raven には想像もできないような変化が描かれている。これまで固い氷のかけらのようだった心がピリピリと割れ始め、涙が気ままに飛び廻る蠅のように Raven の気持を無視して流れているのである。この変化をもたらしたのは、Anne の歌が Raven に、あの大臣を殺害した直後の、寒い夕方の通りを無一文に近い状態で空腹をかかえて歩いていた彼の荒涼とした淋しさを思い出させたのであろうが、もう一つ、Raven をこのように落着かせたのは Anne の彼に対する natural な態度ではないだろうか。それは例えば次のように描写されている。

* he was more used to the absent-minded routine endearments of prostitutes than to this natural friendliness

** Then he turned his face on her. He was disconcerted when she showed no repulsion, but smiled as well as she could with her mouth full.

*** He nearly obeyed her; she'd got him rattled; he wasn't used to normal life and it upset his nerve.

Raven が今迄経験したことのない〈自然な親しさ〉とか、決定的な殺意へと駆りたてる怒りを抱かせる〈嫌悪〉を彼の唇に示さないとか、口に一杯サンドウィッチをほおぼって、むせそうになり、〈背中をたたいて〉とかいう〈普通の生活〉態度が、

Raven を驚かせはしたが彼を落着かせたのであろう。Anne の側の隠された気持は別として、あるがままを否定しないで受入れてくれるように Raven に思われる Anne の態度が、彼の心を和げたと考えられるだろう。

自分をあたり前に扱ってくれているという Raven の気持は、Anne が最初はチャンスがあるにもかかわらず、警察に密告しなかった事実を知って、疑いつつも一層彼女を信ずるようになっていくのである。小屋で過ごす夜の Raven の〈to be able to tell everything, to know that another person knew and didn't care; it would be like going to sleep for a long while〉という安らかな心や、〈and listened with a curious deep happiness to her reply: "We are friends." He said, "This is the best night I've ever had."〉という満足感は彼の Anne に対する信頼の表われであるし、また彼は今、最も人間らしい幸福を感じていると云えよう。従ってこのような幸福感に支えられている彼のことば—君を傷つけやしないよお金をもらったってやしない……君は友達だから 〈I wouldn't hurt you not if I was paid ... You're— a friend.〉に用いられている 〈hurt〉には単に kill と置き換え得るような、或は痛い目に合わすというような意味以上の思いが込められてはいないだろうか。

さて Raven には 〈If people go straight with me, I'll go straight with them〉とか 〈I don't go back on a fellow who treats me right〉ということばに表わされているような、an eye for an eye 式の恩義を感じるところがある。これは outlaw のもっている安っぽい感傷であるかもしれない。しかし Cholmondeley による盗んだ金の報酬という裏切りや、さらに逃亡の途中で、いかがわしい歯科医を訪ね唇を手術しようとして密告されそうであったとき、Raven の気持は次のように描かれている。

He was touched by something he had never felt before: a sense of injustice stammered on his tongue. These people were of his own kind; they didn't belong inside the legal borders; for the second time in one day he had been betrayed by the lawless.

自分と同様、法を無視した世界の住人である彼らが、同じ無法者の自分を裏切るとは、それは 〈injustice〉 だという思いが Raven の胸にこみあげてくるのである。

outlaw の Raven が (injustice) と云うのは不合理なことであるが、さらに彼は Cholmondeley と彼を操る陰の力を許しがたく思うのである。"Dog does not eat dog." の諺を思い出させるところである。

He wanted to find Cholmondeley: Cholmondeley was of no account, he was acting under orders, but if he found Cholmondeley he could squeeze out of him...

He was harassed, hunted, lonely, he bore with him a sense of great injustice and a curious pride.

ここに表われているのは、社会の除け者であり世間に背を向けて生きている仲間同志の裏切りに対する怒りと淋しきであって、自分はそのようなことはしないという自尊心と、それを許さないという自負心がある。裏切りとは元来仲間同志であることを前提としているわけで、Raven が自分を裏切った Cholmondeley とその陰の実力者、老醜の Sir Marcus を追って復讐をしようとしたとき、Raven は二人の生きている世界—自分を守り抜くことしか眼中になく、人を操って自己の利益のみ追求する世界—に在りながら、実は異質の生を生きていたのではないだろうか。

Raven は老大臣の道連れにした秘書については、自己防衛のため (he could always tell himself that he had shot her in self-defence.) であったと弁解しているが、それに続いて次のような一文がある。

But this was evil: that people of the same class should prey on each other.

同じ部類の人間同志がお互いを食いものにすることは (evil) だというのである。仲間を食いものにして犠牲にすること、それは自分が生き残る為に仲間を抹殺することである。またそれは裏切り行為であって、それまで仲間を仲間としてあらしめていた世界を無に帰することである。云いかえれば我と汝の関係として存在したことを否定し、お互いを無意味な無関係な存在へと拡散させることである。このように、仲間を食いものにした結果、人間が存在していることの意味を失わせ、いわば虚無の状態への転落が生じてくるのである。この人間の本質的意味を見失った状況は、聖書が語る罪の状況であろう。このようなことが、(evil) ということば—善の反対状況であり、

道徳的に墮落している〈morally depraved〉(O. E. D.) 状況と、また罪〈sin〉(O. E. D.) をも表わしている—を具体的に説明することにはならないだろうか。

このように裏切りは〈evil〉であるとする Raven であってみれば、前述のことは〈I wouldn't hurt you not if I was paid.〉を別の意味で理解することはできないだろうか。Anne の〈We are friends.〉とか〈No. I'm not going to leave you.〉などということばは、Raven にとっては自分の側に立つ仲間であることの証であろう。従って〈It's good to be able to trust someone like this.〉という彼の安心感と信頼感に裏づけられたとき、この〈hurt〉しない、ということには裏切らないという意味があるのではないだろうか。裏切らない、何故なら裏切ることはお互いの間に存在した今迄の世界を全く否定し、相手の全存在を傷つけ損うことであって、それは人間としての存在を破壊することになるから、という意味が込められているように理解されるのである。

IV

以上のように考えてくると、Raven の純な心とか正義感の背後には、人間として絶対にしてはならぬことがらという規準が存在しているようである。殺人という法を犯すことを仕事としている Raven を描きながら、不法に対する刑罰ではなく、それを越えたところに実は浮んでくる最も人間として必要な条件、或は逆に人間が捨てきれない⁽⁵⁾ morality (善と悪の判断がつくこと) が問題となっているということができよう。

Raven の世界が陰の世界であって、日陰の向うにかすかに光が射してくるのを感じ得る所とするならば、次に、その反対に、明かるい光に溢れた世界の底から暗黒が姿を現わす所であると思われる *The Quiet American* の Pyle の世界が問題となるのである。

* * * * *

- 註1 Kenneth Allott & Miriam Farris, *The Art of Graham Greene*, p.124 Russell & Russell. INC, 1963
- 註2 Graham Greene, *A Gun for Sale: Introduction*, p.9 Heinemann & The Bodley Head, 1973
- 註3 J. B. Beer, *Coleridge the Visionary*, Chatto & Windus, 1959
但しこの場合, fall は伝統的な,天国から悪の世界への転落を表わしているのではないと述べている。しかしながら Mariner の行為が, 仲間と社会の絆からの超越と道徳的な無知を表わすと述べているのは興味深い。
- 註4 Francis L. Kunkel, *The Labyrinthine Ways of Graham Greene*, p.174 Sheed & Ward, 1959
- 註5 註2の序文中 Greene は墮落天使=悪魔がかつて神の下でわきまえており, 今も身にそなえていることがらとして, この言葉を用いており Raven も Pinkie も morality をそなえていると述べている。